雲南省の幼児教育

曹　能秀

雲南師範大学・教授

1.雲南省概要

4000km の国境線があり、94%が山岳地域。25 の少数民族が居住しており、その人口は雲南省全体の 3 分の 1 を占める。全国の貧困人口の 8%が雲南省に居住しており、全体的に経済は発展していない。

図 1：雲南省の地図

95 年以降、中国全体では幼稚園に入園する子どもが少なくなってきているが、雲南省では反対に増加傾向にある。幼稚園の数、幼稚園の就園児数すべてにおいて増加している。雲南省政府の幼児教育関連予算は 163,776,000 元（100 円＝8 元）であり、14 の省と地域の中の 4 番目、他の西部の地域と比較しても高い数値である。雲南省が幼児教育を重視していることが分かる。しかし、総合分析学校の効果と収入では依然として 16 番目であるなど、他の地域と比較して遅れている点もある。また、危険な部屋の面積が 9000 平方mで 1 番多く、教室の面積と本の冊数と固定資産では第 5 番目であるものの、1 番のチアンスー省との差は大きい。教育経費収入の合計は、他の省と比べてまだ低い。雲南省は教育経費の多くを教員の給与に使っており、学校の発展には用いられていない。幼児教育は普及してきてはいるが、まだ他の地域と差もあり、

充実しているわけではない。

2.具体的な状況―現状、問題点とまとめ

2－1　雲南省幼児教育の現状

雲南省は経済的に発展していないため、そのことが幼児教育の発展の大きな束縛となっている。他の地域と比べて、差はまだ大きい。しかし、1978 年より雲南省政府・教育委員会・行政機構・幼児園教諭等の努力の結果、幼児教育は大きな発展を遂げてきている。

（1）幼児教育の量的拡大

幼児教育機構の規模は大きくなってきている。幼児園・学前クラスの数は共に増えてきた。幼児園は 1978 年の 371 校から 1985 年には 1981 校へと急増した。その後は増減を繰り返している。その要因のひとつとして、1995 年の市場経済体制への変化により、企業に付設されていた幼稚園が合併や閉鎖となったことなどが考えられる。園児数は 1978 年以降増加を続けている。（表 1）

表 1：雲南省の幼児園数と園児数の推移

年度	幼児園数（所）	園児数（万人）
1978	371	4.08
1980	591	10.32
1985	1981	19.68
1987	1798	22.91
1988	1760	23.32
1989	1522	25.86
1990	1434	30.06
1992	1054	40.26
1993	1093	43.68
1994	1323	48.71
1995	1340	51.74
1996	1501	53.35
1997	1412	53.72
1998	1500	54.37
1999	1568	57.75
2000	1770	60.35
2001	1530	62.70

＜学前クラス＞

1998 年から 2002 年には、幼児園と共に学前クラスの数も増加した。その数は、幼稚園より学前クラスの方がはるかに多い。2002 年以降幼稚園数は減少してきているが、学前クラスに属する子どもは増加している。つまり、1 年間のみの学前クラスが多く、雲南省の幼児教育の発展レベルはいまだ低いといえる。

＜校舎＞

表 2 から分かるとおり、1991 年から幼稚園の校舎面積は拡大し続けている。特に 1997 年には急増している。また、園舎内に占める危険な部屋の面積は減少してきている。1991 年から雲南省の学校の校舎の状況は改善されてきたと言えよう。

表 2：幼児園校舎の状況（1991 年～）

年度	校舎面積 (m^2)	新規増築面積(m^2)	危険部屋の面積(m^2)	危険面積率（%）
1991	663,697	40,559	17,113	2.6
1992	710,409	27,043	14,652	2.1
1993	762,300	29,120	9,591	1.3
1994	848,524	38,188	7,798	0.9
1995	901,348	51,807	9,418	1.0
1996	934,690	36,302	10,440	1.1
1997	1,051,511	106,280	7,326	0.7

＜その他の幼児教育機構＞

幼稚園、学前クラス以外にもさまざまな形態の幼児教育機構が発展してきている。貧困地域では、厳しい経済条件と生徒数・教員数の少ない状況に対応するため、「混合クラス」・「巡回クラス」・「遊びクラス（プレイグループ）」などが実施されている。「混合クラス」とは、複学年で運営されているクラスであり、「巡回クラス」とは、教員が村々を巡回しており、曜日や時間帯によって先生が異なるクラスである。また、「遊びクラス（プレイグループ）」とは、託児所的な役割を果たしている。

また、保山市などの裕福な地区では、「株式クラス」とよばれる教員自身の資金（286 万元）により創立された学校もでき始めている（土地は政府が準備）。

（2）幼児教育の教師の増加と質の向上

1970 年代から今日までの 30 年で、20 代から 40 代の学歴の高い教師が増加してきた。1995 年から教師数が増加し 2000 年がピークであった。特に専任教師（日本でいわゆる幼稚園の教師）が増加している。2001 年には一時減ったが 2002 年にはまた回復した。

高師卒業以上（四年制大学）、中師卒業以上(三年の幼児師範学校、短期大学、）取高学校卒業以上(専門学校)、高中卒業以上（高校卒業、中学卒業以上）初中卒業以下（中学校を卒業していない）

雲南省の幼稚園教師の学歴をみると、1998 年には、全体を占める割合のうち短大卒業者の数が最も多く、次いで中学校卒業以下、高校卒業以上が多い。専門学校や四年制大学の卒業者数はいまだ少ない。しかし、1991 年から 1998 年にかけて、専門学校や四年制大学が増加し、中学校卒業以下は減少する傾向にある。（表 3）

表 3：雲南省の幼稚園教師の学歴

年		1991	1992	1993	1994	1995	1996	1997	1998
教師総数		12372	13980	15179	16324	16330	17254	17618	18272
4 年制大学卒	人	221	306	355	404	509	550	930	1250
	%	1.8	2.2	2.3	2.5	3.1	3.2	4.9	6.8
師範学校・短期大学卒	人	4307	5190	5833	6386	6657	7119	8310	9050
	%	34.8	37.1	38.4	39.1	40.8	41.3	43.9	49.5
専門学校卒	人	547	717	811	873	860	982	1205	1277
	%	4.4	5.1	5.4	5.4	5.3	5.7	6.4	7.0
高校卒	人	2888	2995	3197	3563	3456	3486	3570	3672
	%	23.4	21.4	21.1	21.8	21.2	20.2	18.8	20.1
中学校卒、及びそれ以下	人	4409	4772	4893	5098	4848	5117	4922	4405
	%	35.2	35.2	32.8	31.2	29.7	29.6	26	24.1

(3) 幼児教育の質の向上

①幼児教育の管理の科学化と規範化

1995 年に雲南省は、中国幼児教育要領に基づいて独自の管理条例を制定した。この条例では、幼稚園の業務規定やカリキュラムなどが規定された。また、これを機に雲南省が政府として管理するため、幼稚園と学前クラスの調査、登録を行った。この調査で政府のチェックが入ることにより、幼児教育が改善され、質が向上した。1981 年以降、旧ソ連の影響により厳しい教育が行われていたが、1989 年の雲南省幼児工作規定は、子どもの遊び中心の活動へと変化するきっかけとなった。

1998 年には雲南省教育委員会が第 9 次 5 カ年計画（1995 年から 2000 年まで）を発表し、雲南省幼児教育の発展に向けた目標が示された。2000 年までに幼稚園就園率を、全対象年齢児（3 歳から小学校入学前まで）の 30%（都市部は 70%、地方や遠隔地では 20%）を達することが目標として掲げられ、幼稚園が足りない場合はインフォーマル教育で補うこととされた。

また、教師試験合格者を 75%とすること、園長や副園長は 1 回以上の訓練を受け、全教師が教師資格を保有することも目標とされた。1999 年 4 月 21 日～23 日には、雲南省教育委員が幼児教育工作(仕事)会議で全国全省の幼児教育の発展に向けた目標達成のための会議が実施された。さまざまな会議や法令が積み重ねられ、1991 年から 1998 年に幼児教育の運営管理や規範化が進んできた。

②幼児教育レベルの向上

＜児童観と教育観の変化＞

教師の児童観が変化したことが一番の大きな改革だろう。1996 年幼児教育、学前教育の教師も自らが学ぼうという姿勢ができ、1999 年の法令から子どもの目線に沿って子どもの遊びを支援するという姿勢、子どもを一人の人間として扱い、子どもを大切にするという児童観、教育観へ変わってきた。

＜ケアと教育＞

幼稚園とは三歳以上のケアと教育を共にする機構であり、幼児教育は学校教育とは異なる。教育対象者の子どもの発達は未熟であり、大人のケアが必要である。幼稚園に滞在する 8～10 時間は、ケアと教育の両方の役割が必要である。雲南省の都市と町、地方の町の中心幼稚園では、専任教師以外に保育士が存在しなくてはいけない。保育士の役目は専任教師の補佐で直接子どもたちのケアや教育には携わらない。

＜全面的な教育＞

体、知、道徳、芸術の全面から発達し、互いの能力、技術を促進させるべきである。以前は健康、道徳、芸術にも重点をおかれたり、特色教育として、一つの教科のみ特化したりしていたが、現在では全面的な教育を持って教育することの重要性が高く推進されている。

＜遊びの重要性＞

遊びは子どもの発達にとって重要であり、発達段階に合わせた遊びをするべきである。遊びを基本とし、生活の中で学ばせることが教育である。

2－2　雲南幼児教育の問題

雲南省の幼児教育は全体的に遅れているといえる。その背景には経済的な理由や地理的に都市部から遠いという要因がある。たとえ、教員研修が行われても、都市部まで出て研修を受けるだけの経済的な余裕が教師にはない。

(1) 幼児教育観がまだ変わっていない

大部分の幼児教育と学前クラスの教師は子どもの発達の上で重要な時期というのは認識しているが、理解をしていない地方の親、教師も多数いるのは確実。幼児教育の場派安全に子どもを預ける場所として思っている。知的発達にのみ重点を置き、道徳や社会性を大事にしていない部分もある。またこの知的発達は知識の構築だけで創造性や発展性を高めるものではない。

(2) 政府が幼児教育を重要視していない

経済的に発展している地域の斥江省、江蘇省は、民間の幼児教育が発展している。経済的に発展してない地域では、義務教育ではない幼児教育にまで手をのばす余裕がない。また、幼児教育は重要視されていないため、現在は義務教育と高等教育に力が入れられている。

(3) 法律の保障と必要な政策法規不足

義務教育と高等教育と職業訓練教育に関しては、中国全土に共通の法律があるが、幼児教育にはそうした法律は存在しない。これは、雲南省の幼児教育の運営や発展にも不都合である。偏狭の地域、紅河州では幼稚園が町の中にあるものの、学前クラスに入る人も多い。小学校の学前クラスに入る目的は、より早く小学校の基礎である読み書き計算の強化することであり、幼稚園の年長と学前クラスの競争が始まっている。本来、学前クラスは幼稚園のない地域に幼稚園の代わりとして作られていたものであるが、現在ではその価値や地位が逆転している。

また、営利目的の質が高くない民間幼稚園も出現した。民間幼稚園ではお金を使わないために子どもを粗末に扱い、また教師のレベルも低い。幼稚園設置基準が法律として定められていないため、幼児教育の運営や質にゆるさが出てくるのである。

(4) 幼児教育の発展が遅れている。

雲南省では幼児教育を受けている子ども数が全体的に少ない。雲南省では 27.05％の子どもたちが幼稚園に入っているが、中国全土の経済的に発展していない地域の平均が 35%であることと比較すると、雲南省がいまだ低いことが分かる。また、雲南省には 1568 の幼稚園があり、施設数としては 7 番だが、1 万人当たりの幼稚園数は 8 番目、専任教師：幼稚園児の割合は 1:31 であり、雲南省の幼児教育はまだまだ発展が遅れているといえる。

(5) 幼児教育の発展格差

経済発展地域と貧困地域や少数民族地域の幼児教育の発展に格差がある。その背景には、経済的な理由とその地域の指導者から幼児教育に対する賛同が得られないことがある。これら地域では、幼児教育はまだスタートラインに立っている状態である。

また、幼児教育への投資には園長の考え方による。経済的には中級レベルの宜良県の幼稚園

では、園長の考え方により自費で幼稚園の改善を図っている幼稚園もある。経済的に発展している幼児園の設備は活動室、寝室、トイレ、ピアノなど充実しているが、経済的に貧しい地域では、光の少ない部屋で、設備も乏しい状況で運営されている。また、貧しい地域では教員も小学校卒業の人が多く、そのような教師はケア(安全に過ごす)の提供しかできない場合が多い。

（6）適したモデルがまだできていない

1981 年の幼稚園教育要領には、衛生、体育、道徳、科学、音楽、芸術などについて詳しく記述してあった。しかし、1989 年以降の要領には詳細な記述がなくなった。政府は、地域の特性に応じて各園で応用しやすくするため、大枠のみを提供したのだが、実際の現場の教師は、自分たちの地域にあったモデルがないため模索しているのが現状である。

（7）教育改革不足、幼児教育と家庭、地域の連携不足

児童観と教育観、「小学化」の認識に差がある。幼児教育の目的は親への教育も含まれているはずであるが、親との連携が十分にもたれていない。

2－3　まとめ

（1）幼児教育の研究

雲南省師範大学と幼児師範学校で、幼児数学、幼児のバイリンガル教育(英語、中国語)、創造性などの研究が行われている。雲南省師範大学の特色は他国の幼児教育比較研究およびカリキュラム研究を重点的においていることであり、今後は都市部と農村部の比較研究を進めていく予定である。

（2）政府の政策

政府の政策には中間作用がある。また、雲南省でどのくらい幼稚園が発展しているかを把握し、今後の発展のための計画を立てることが求められる。

（3）幼稚園などの実践

昆明市第一幼稚園など、特徴のある実践を行っている幼稚園もある。

2－4　課題

今後の課題としてまず挙げられるのは、教育の原点に返ることであり、これは子どもの発達には最も重要な要素である。また、農村教育を中心におくこと、また、各地域の独自性を活かし、各地域に合わせた発展を目指すことも必要であろう。

3.日本の幼児教育が貢献できること

今後、日本には、理論・実践に関する中国との協力研究を期待する。研究者や教員、園長の相互の訪問などの交流も重要であろう。また、幼児教育実践者の共同養成や資金面での援助も望まれる。